

くじら企画 第十四回公演

「怪シイ来客簿」

作・演出 大竹野正典

登場人物

女 女 女 弟 少年 男 男 男 男
3 2 1 年 4 3 2 1

幻覚の女 母 弟 (男3) 弟 父 男
ゆめ の妻 妻の恋人

女 2 男 2 女 1 男 1 女 1 男 1 女 1 1

舞台に布団が敷かれてある。

その中に男が一人眠っていた。

遠いラジオから、二村定一の唄う「君恋し」が聞こえる。

暗闇の中から数人の男女がやつて來た。

二村定一の声にオーバーラップするように、低く、「君恋し」を口ずさんでいる。男女、布団の男を取り囲むようにして、立ち止まつた。

電話が鳴つた。

布団の中の男、六回ほどコールを聞いてから、億劫そうに半身起き上がつた。

—— はい

お兄ちゃん ちょっと来てもられないかしら

—— どうしたの

おじいちゃんがね おばあちゃんを突き飛ばしちゃつたらしいの

親父さんが ——

俺は突き飛ばしてなどおらん

おばあちゃんが縁側から庭へ横倒しに落つこつちやつて 肩か腕か とにかく折つたらしくてあたし達のほうに逃げてきたの
(腕の付け根を押さえて) こここの所だよ こここの所から庭にぶつけたんだ

男 1	男 2	男 3	男 4
女 1	男 2	男 1	男 2
女 1	女 1	男 1	男 2

そりや ひどいな
 俺は突き飛ばしてなどおひる
 それで近所のお医者さんを呼んで応急処置をしてもらつたんだけど 明日 病院に連れて行かなければならぬようね
 こいつは怪我などしておひる
 親父さん 興奮しているようだな
 興奮しているのよ おじいちゃん —— 「うちの家まで来ちゃつておばあちゃんは怪我などして
 いないってそういう張るのよ
 だつて 腕が動かないんだよ
 俺は認めん
 聞こえるでしょ 俺は突き落としたりしないし おばあちゃんも怪我などしない こつちへ来いって云つて自分の家の方へ連れて行こうとするの おばあちゃんは顔も見たくないって泣き叫ぶし
 まだまだおじいちゃんの力は強いわよ —— お兄ちゃん お仕事?ちょっと来て貰えると収まり
 がつくと思うんだけど
 今 何時だい
 夜中の一時を回つたといなふだけど ——
 すぐ行くよ
 悪いわね

男1、布団を半折に畳んだ。男2を残して他の男女は闇の中に消えた。

男2、ポツネンと正座をしていた。

男1、男2の前に胡座を組んだ。

こんな事だらうと思つたよ

なんだ

俺も来るのが少し遅くなつたけれどね 弟も勤め人だし 俺がつく頃にはもう皆寝静まつてゐるだろ
うと思つてたんだ

ふん

どうせ 他愛も無い事がきっかけだらう 親父さんは殴る気だったかもしだれないが 縁側に逃げた
おふくろさんが落ちそうになつたんで支えようとしたんじゃないのか それをおふくろさんが突き
落としたんだと思い込んで —

お前 —

なんだい

いつたい何の話をしているんだ

— いや — 別に

お前 — 身体は健康か

駄目さ もう衰えてきたよ

そうか — 僕は少しいい — 最も俺なんか体が良くなつても喜ぶべきか

男1 男2 男1 男2

男1 男2 男1 男2 男1 男2 男1 男2 男1 男2 男1 男2 男1 男2 男1 男2

男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1

悪いよりはいい

そうだ 悪いよりはいい

仕方が無いな

ああ

仕方が無い どうにもこうにも閉口だ いつ死ねるのかわからん
九十五才だったかね 今年

そんなになるか

俺がもう五十越したからね

まだチンピラみたいな事をしておるか

ああ チンピラだね たぶん死ぬまでそうだろう

ふん チンピラなど育てるつもりじゃ無かつたが

そうだな 野良犬みたいなもんだ

野良犬より始末が悪い

しばらく こつちに泊まるよ

何故?

お袋さんがしばらく入院したら 親父さんも不便だろう

何故あいつが入院するんだ

肩だか腕だか知らないが あの歳で骨折したんじゃ治りも悪いだろうからね

男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2

ふん — 勝手にしろ

ああ 勝手にするよ

しかし犬が あんなに訓練できるものかなア

何の話?

何とかいったなア —

盲導犬さ 僕も犬を飼った事があるが

俺は駄目だ

わがままだから

犬は兵隊とは違う

しつこく訓練しなくちゃ何も出来ない

兵隊だってそうさ 法律の力で いう事を聞いているだけだ

— 主従の判断がつくのだろうか

何が — ?

犬さ 訓練が難しいだろうな

訓練は反射神経だ 主従つていつたって そう思っているのは人間の方で

犬は反射神経だ

忠実なものだな

誰も忠実な奴なんて居ないんだよ

お前のところも何か飼っているのか

犬が居るよ

やっぱり犬か 訓練が大変だろう

訓練はしない 僕のところじゃ一切やらないんだ

訓練がな 大変だ お前がやるのか

世話はカミさんがしてるよ

男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2

誰 | | ?

女房 |

大きい犬か

いや小さいんだ 室内犬つてやつ チワワ
やつぱり小さくても 訓練しないと駄目か
しないんだよ

部屋を汚すだろう

あ いくつかの基本ルールは生まれたときに憶えさせるんだ

そうだろう 大変だ それでお前は 犬を訓練して飯を食つているのか

いや そうじやないんだ
まア何でもいい しつかりやれ

俺を当てにしてもうつちや困る 俺はもうすっかり駄目になつた |

黒龍江を艦で上つて 白系ロシア人がパルチザン共に追われてごたごたするのを鎮めた事があるんだ—— 白系ロシア人は家を捨ててばらばらに逃げ散つちゃって パルチザンはそれに火をつけたり 集団で酔つて暴れたり —— 軍隊が行かないとしようがないんだ —— それで 白系ロシア人が捨てていった獵犬だな それがたくさん居て始末がつかない
—— ああ 犬の話か

男2

男1 男2

男1 男2

男1 男2

男1 男2

パルチザンは殺すつていうんだ それは止せといつているうちに それじゃ海軍で銅えというんだ
銅えつたつて そうはいかねえやな どうしようつて いつてるうちに とりあえず方針が決まるまで
つてんで四五十匹も居たかなア そいつらが艦の中に入つてきちゃつたんだ

どうにもしようがないんだ 犬の方もかわいそつたねえ 艦内では糞小便是許さんからな
夕方 岸辺に近いところに碇泊すると 犬どもが舷側で待つて じやぼーんと飛び込んで泳いで
岸に渡つて 小便をしてまた艦に泳ぎ戻つてくる

結構 慣れてるんだな
けれども外海に行くとな 犬達は待ちに待つてが艦が停まりやしない そのうち待ちきれずにじ
やぼーんと飛び込んだつて岸が無いんだ 泳いでも泳いでもなくて どうしていいかわからな
そのうち疲れて沈んじまう奴もある

海の中では しないんだな

なに —

いや — 泳ぐのと両方一緒ににはできないな

何日も行動が続くと 犬どもは艦内を走り狂うんだ それで我慢の限界が来てタラツとちびる そ
うして走る タラタラツとちびる 水兵が叱るから 走つて走つて タラタラツ 結局 小便がな
くなるまでそうやってちびりながら走つてる —

男2、いいながら闇の中に消えていった。

腕を吊つた女2が、女1に付き添われて現れた。

男1 女2 男1 女1

女2

10

男1 女1 男1 女1 男1 女2 男1

近くの大学病院で診てもらつたんだけど 左の鎖骨にヒビが入つてゐて
そうかい その程度で済んだんならまあ安心だな
何云つてるんだい あんな気違ひのそばに居たらそのうち殺されてしまつよ
親父さんは気違ひじゃないよ 只もう九十五だからね 自分で自分の身体も気持ちもコントロール
がうまく効かないんだ だから当り散らしちまう 側に居るお袋さんは堪つたもんぢやないだろう
けど 親父さんは親父さんで寂しくて不安なんだろう 耳も随分遠いしな
お前は離れてのほほんと暮らしてゐからそんな香氣な事が云えるんだ あたしはもう真つ平^{ヒラ}免だ
おじいちゃんかあたしかどつちかが病院に入らなくちゃ収まらないわよ
ああ —

このままじやあたしは殺されてしまうからね

— だから お袋さんが病院に入る ひとまずそれでいいぢやないか ゆつくり休んで「いよ

お兄ちゃん しばらく居れるの?

そのつもりで仕事道具も袋に詰めて持つてきただ

ここでお仕事できそう

おれはたまさかだからな 気持ちが張つてゐるから大丈夫だよ 長くなると判らんが

おじいちゃんは お兄ちゃんが来るといいみたいね

一緒に暮らせはすぐぶつかる それは親父が耄碌する以前からだな

女1

女2

男1

女1 男1 女1

女2

男3が現れた。

でもパパは嫌われるわ

弟は長い事親父さんと暮らしたからな 親父さんに云わせれば弟はまともな人間で それならもつと親父に忠実になるべきだと思つてゐるんだ

犬じやあるまいし

まあ似たようなもんだ親父さんから見れば自分以外の人間は全て不完全に思えるんだろう 身も心も海軍式がしみついちゃつてゐるからな

おじいちゃんはダンディなのよ 絶対あたしに裸見せないし

おむつ —— 「おじいちゃん穿かせてあげましょか」つていつても 「うやつて手を上げて「まアまアまア —— 」つて 下着も自分で洗つて自分で干すのよ

あたしが帰つてきてからは 甘えっぱなしだけどね 神経質だからちょっととおしつこちびつただけで紙おむつ取り替えろつてうるさいの 夜ベットに入つてからが堪らないのよ 取り替えるあとからもう濡らしてゐるんだもん その度 あたしのどこまで起しに来るんだよ どれどれをどういう風に穿けばいいのかわからないし 穿き方も判らない 「お前着替えを隠しただろ」つて突然怒鳴りだすし 布団だつて四枚も五枚も重ねてまだ寒いって云う それでもう一枚重ねてやつたら今度は「重い」つて いつたいどうすりやいいのさ

女 2 男 1 女 1 男 3 男 1 女 1 男 3 男 1 女 1

あらパパ 帰つてたの
寝てるよ

マサヒロ やつぱり鎖骨が折れてたよ あたしゃ病院に行く事に決めたよ
ヒビだろ

ヒビの方が長引くって大学の先生が云つてたのさ ヒビの方が大変だつて ねえヨシコさん
ええ —

まあそういう事だ お袋の替わりに俺がしばらくここに居るよ

いつまで—?

判らんが 暫くほとぼりがさめるまでは居るつもりだ
(笑つて) ほとぼりが醒めたつてまたすぐに騒ぎ出すよ

そりやそうだろうが

無理しなくていいよ — 仕事があるんだろう

そう思つて仕事の道具も持つてきた 袋に詰めて

親父が仕事なんかさせてくれないぜ

まあ 雜文ぐらいうらチヨコチヨコ書けるだらう — 今のところ大きい仕事も無いからな

パパ お腹まだいい? — おばあちゃんの入院の準備がしたいんだけど

そうだな — いつから行くの

明日の朝からだよ — 六人部屋だけど文句も云えないよ 混んでるんだからね大学病院は

男
1
男
3

朝なら 僕が車で送つていくよ
そうして貰えたら 助かるわ

女1、女2、去つた。

男
1
男
3

どうだい体の調子は

一時は酷かつたがね 二時間おきに睡眠の発作が来る 小一時間うとうとしてまた目が覚める 幻
覚ばかり見るしね まとまつた睡眠が取れない —— 最近薬が出来たんで少しはマシだが 辛い
事に変わりはないさ 幻覚はますます酷くなつてくる

全く奇妙な病気に取り付かれたもんだな

若いときのムチャが祟つたんだろうな —— 治らないんならこれが僕の健康と思わなければ仕方
無い

ふうん

一つ気が付いたことがあるよ

なに

親父はきっと幻聴に見舞われてるに違いない

親父も兄貴と同じ病気だつていうのかい

そつとはいわんが もう三十年このかた耳が遠くて 普通の会話をほとんどしていない 僕は家に
寄り付かないし お袋さんも昨年足を洗うまでは商売に身を入れて家に帰らなかつた お前だつて

男 3

男 1

男 3 男 1

男 3 男 1 男 3

男 1 男 3 男 1 男 3

こっちに栄転するまでずっと名古屋だったろう 親父なんか友達つきあいも無いし話しが相手など一人も居なかつたんだ 親父は屈しなかつたが 内攻はしているよ きっと幻聴が出てる 薫碌とは別に 長い事幻聴とだけ会話していたようなふしがある

現実と区別がつかないのか

俺の例で云えば 幻視 幻覚 幻聴つてものは 無論実際のものじゃない それは俺自身判つてゐるところが少し時間が経つと 実際のことだったか幻聴の方の風景だったか 記憶がこんがらかつてくるんだ

厄介だな

ああ そういう周りの人間には判らない色々の事が親父の中にはあつて 俺達はどうしてそんな誤解をするのか判らない事で怒つたり興奮したりするのかも知れない

それで — なんだ

それで俺達にどうしろって兄貴は云うんだ

うん 例えは — — ノートを作つて筆談を親父と交わしたらどうだらう 紙に書いておけば 後で読み返す事も出来る

— もう遅いよ

もう遅いんだ 見れば判るだろ

遅いな 確かに — — しかし まだとばくちでもあるぜ 親父はジリジリジリジリ弱つてきた

百年近く生きてこうなつて もしかしたらもう百年 だらだら下降線をたどつて居るかも知れない
俺は小さいときから —

俺もだよ 俺は自分が最後に 一人生き残るんだと思つていた

そうだな

俺は親父が五十過ぎてからの子供だ 物心ついた頃にはもう爺さんだつたんだ 俺が成人する前に
この人は亡くなるだろうつて思つてた お袋も亡くなれば 俺と兄貴の二人だけになる そうなれ
ば俺は — 兄貴の事を背負つて生きようつてずっと思つてたんだ

ハハ俺だつて自分がいつかきっとたれ死ぬだろうつて思つてたからな

正直 兄貴が作家になるなんて考えてもみなかつたよ
延長線だよ 作家も博打打ちも正体はさほど変わらん

今だつて 時々想像するよ 尾羽打ち枯らした兄貴が 俺に助けを求めてほうほうの態で逃げ帰つ
てくる様を

そうなつたら養つてくれるかね
多分ね

— 济まんな 親父さんの事も含めて 俺はなんだつてお前におんぶしてもらつてる —
よく兄貴に浅草に連れて行つて貰つたよな — 最初は俺がまだ小学校に上がる前だつた たし

か

俺が小学校の五年の時だ

家からとぼとぼ歩いて 子供の足で片道三時間近かつた

男1
男3

男1
男3

男1
男3

16
男1

男1
男3

親父さんの目を盗んで 小金を失敬してな
何処に行くのって聞いたら 兄貴が「いいところ」って云うんだ 僕の手を引っ張つて 黙つて何
処までも何処までも歩いてさ 早足で 兄貴の足は泣きそうになるぐらい早かった
神楽坂を下つて 飯田橋 水道橋 春日から本郷三丁目を抜けて湯島天神 —
湯島から不忍池をぐるっと回つて上野駅 台東区役所を折れて稻荷町 田原町 雷門から浅草寺の
脇を抜けて 花やしき 浅草六区 —
いろんな小屋に引っ張りまわしちゃつたな アチャラカだの軽演劇だの
兄貴は芝居観ながら 僕の顔をちらちら眺めてたな
お前が面白がつて いるか気になつてな
面白かつたし怖かつた 飛んだり跳ねたり 調子つぱずれで唄つたり 殆つたり蹴つたり あんな
大人達が居るなんて信じられなかつた
俺は頭がイビツだからな 普通の子と横並びに一緒に勉強したり遊んだりするのが出来なかつた
自分にはそんな権利が無いと思つていたんだ それが浅草の芸人達をはじめて見た時 こういう生
き方なら 俺にも少しは真似できるかも知れないつて思つてね もつとも俺は引っ込み思案で何の
芸も出来ると思わなかつたが —— どうにも仕様がないね
どうにも仕様が無いってね —— よく下手な役者を兄貴が苦笑するんだよ 僕もそれがいつの間
にか移っちゃつて「どうにも仕様が無い」って苦笑する事を憶えたんだ
すまんと思つてるよ今でも —— 僕はきっと仲間が欲しかつたんだ あの浅草の人達のことを一
緒に喋れる仲間が —— 僕は幼いお前が苦笑するようになつた時 ほんとはゾツとしたんだ

しかし俺はそうと判つて 毎週お前を浅草に引っ張り回しちまつた
どうにも仕様がないな（苦笑した）

ああ

おれは芝居を見てる途中から 家の事が気になりだして「帰ろう 帰ろう」って 親父やお袋に知
れるのが怖くつてさ —— なのに兄貴は生返事をするばかりで何時までたつても席を立たない
早く帰らなきや親父に云い訳が立たないって判つてるので どうしても席を立てない 次のコント
が終わつたら この歌謡ショードが終わつたらって 内容なんか上の空で観てるんだが どうしても
立ち上がりれない

結局 最後まで観ちゃつて 都電通りを二人で走つて走つて ——

仕方が無いから 都電に乗ろうつて停車場で待つんだがいくら待つても都電が来ない
やつと来たと思つたら満員の電車に先客がギュウギュウ乗り込んで 俺達の乗れる番まで回つてこ
ない

仕方が無いからまた走つて走つて

日がどんどん暮れてくると心細くなつてきて 俺は兄貴に手を引かれながらワンワン泣きながら走
つたんだ —

性慾りも無く毎週のよう同じ事の繰り返しだつたな
なんだろうな まるで中毒したみたいに頭の中がしびれてた氣がする 後ろめたさが快感になるよ
うな変な感じだった

男 1 男 1 男 3 男 1 男 1 男 3 男 1 男 3 男 1 男 3 男 1 男 3 男 1 男 3
—— 僕は今でも家に帰りたいってよく思うよ 夢にもちょくちょく出でくる

男 1 男 3 男 1 男 3 男 1 男 3 男 1 男 3 男 1 男 3 男 1 男 3 男 1 男 3

ここに?

いや これじゃなくってね

改築する前のあのボロ家にかい

そうなんだけど —— お前と一緒に浅草から走り帰ったあの家にさ

おいおい 止めろよい歳こいて

馬鹿 子供に帰りたいって話じゃないぞ

じゃあ なんだい

なんだろうな —— 親父もお袋もお前も全部ひつくるめて一緒に暮らしたい あの家で それを

考えただけでボロボロ涙が出てくるくらいだ

取り返しがつかないな —— 老境かね

ああ そうかも知れん —— 若い頃の不摂生がたたってるんだな いつ死んでもおかしくない体

だ —— 実際 親父さんより俺のほうが早いかもしけんね

全く耄碌してるだけで身体はいたって頑健だからな —— 兄貴

なんだ

親父さんを施設に入れるって手はどう思う

はつきりいって俺達はもうヘトヘトなんだ 親父は夜も昼も無い 考えにどうわれたら 誰も彼も
叩き起こして詰問責めにする 自分が納得するまで寝かせてくれない 堪つたもんじやないんだ
親父さんにはこの家しかないんだぜ

そりや判つてゐるんだが
判つてゐるんなら お前達が「」を引っ越すのが筋つてもんじやないか

いくら立て替えたからつて 「」の家の主はまだ親父さんだ —— それに「」の家は親父さんのアイ
デンティティそのものだと云つてもいい —— そこから引っペがされたら親父さんはどうなる
じやあ俺達はどうなる

とにかく親父を施設に入れるのは 僕は「免だね

兄貴 そんな口マンだけじゃ 僕達は生きれないんだ

判れよそこを

皆が生きるために親父さんは黙殺されるのか

兄貴は俺達に親父と心中しろつて云うのか

男3、立ち上がり、去つた。

男1

—— (ひとり「」ちた) 責め込みすぎだよ 何やつてるんだ(仰向けに寝転んだ)

ローン、ローンと太鼓らしい乾いた響きが、遠くの方から聞こえてきた。

女3が奥の闇から現れた。

お焼けになりませんでしたのね

女3

男3 男3 男3 男3 男3 男3 男3

男 1 女 3 男 1 女 3 男 1 女 3 男 1 女 3 男 1 女 3 男 1 女 3 男 1 女 3 男 1

—— え? (半身起き直った)

戦争で

あ — 残ったんです おかげで

ご無事でよござんした それにお元気そうで

元気どころか — (苦笑した)

本当に立派におなりになつて

からかっちゃいけません ただやつと生きているだけです

お二方ともまだご健在なんでしょう 親御様たちは

ええ

どなたも「無事でお幸せね なにもかも」「無事で

失礼ですが — どちら様でしようか

(目を吊り上げ 足を踏み鳴らした)

(すでに気付いている)あ 草野先生でしたね あの時は、『厄介になりました

(足を止めた)

臨海学校に行つた時 ジンマシンで熱を出して 大きな瘤のような発信が胸から頭からぼぼぼぼ出
ちゃつて 先生が寝ないで看病してくれた — 忘れるなんてどうかしていました 確か東京まで お医者さんの車で一緒に付き添つてくださいました —

(田を吊り上げ 足を踏み鳴らした)

失礼 — ええと お袋のお友達の吉岡さんでしたね —

太鼓の音が、すでに近づいてきていた

男1

女3
男1

じゃあ町会議員の溝口夫人——中学校のときの三浦君のお母さん——あ沖縄に帰ったと座君のお母さん——いやそうじゃないあなたは確か——幼稚園の時の由美子先生でしょ
う——
(足を踏み鳴らし続けた)
そうじゃないんですか 甘つたれで強情な俺をいつもなだめすかしてくれた由美子先生でしょ
う俺はそう思いたい—— そうでなければ—— そうでなければ—— 嫌だ 顔を近づけない
で下さい

太鼓の音、ピークに達して突然消えた。

女の姿も無い。

男1の隣に女4が既に現れていた。

(驚いて後じさつた)

私よ 目が醒めた

——どうして君がここに居る

あなたが叫び声をあげたから 来たのよ

男1 女4 女1
女4 男1 女4 男1

男
1

知らない女が尋ねてきたんだ
いや知っているのかかもしれない
思い出せないだけかも
れない しかし | |

あなたが幻覚見る度に私の方が吃驚するわよ
——しかし

何
よ

22

どうして君が親父の家に居るんだ

(見回して)あれ―― しかしあ袋さんが入院するんで
いつの話をしてるのよ
俺は暫く親父さんと――

あなたが起きるまで待つてたのよ

何だい

鈴木君 来てるの

鈴木君が

私が呼んだんじゃないわ
どうか だったら会おう

わたし やつぱり あなたの事 荷が重いわ

だからいいじゃないか
君が離婚したいんだつたら

そういう薄情なところが嫌いよ

俺は止めないがね

男 1

女 4
男 1

薄情で云つてゐるんじゃないだろ 僕は君を縛りたくないし僕も君に縛られたくない —— 自由にすればいいじゃないか

わたしがいつあなたを縛つたのよ

女 4

男 1

なんだつたら 僕は大歓迎だ 花嫁のパパの気分だ 実際 十以上年齢としが離れてるんだからね それに僕はいつ死んでもおかしくない身体だし

あたしもそう思つてたわ あなたはきっと数年で死んじゃうつて —— ナルコレプシーなんて訳のわからない病気の上に 糖尿病だし 高血圧だし —— 胆管結石の手術が失敗した時には 本当にもう駄目だと思つたのに どうして生き返つちゃつたのよ

おいおい —

そりや死ねば悲しいけど わたしの第一の人生が開けるつて半分以上本気で思つてたのよ —— 大病したくせに 毎日毎日無茶苦茶ばかりして それなのになんで最初にあつたときより元気そつなのよ

いや元氣というより 今のうちにやつておかなければならぬ事は やつておかなくちゃね
—— 作家の女房なんともうたくさん 私もつとつましい事がしてみたいの
そう優しい事じやないとおもうがね

あなたとじや 出来ないわ

——
うん

男 1
女 4
男 1
女 4
男 1
女 4

男 1 女 4
女 4

男 4 女 4
男 4 女 4
男 4 女 4
男 4 男 4
男 4 男 4
男 1 男 4
男 4 男 4
男 4 男 4
男 4 男 4
男 4 男 4
男 4 男 4

ちゃんとした居場所が無いんだもの 辛いわよ
そうだな

彼はサラリーマンだし あなたみたいにお金の出入りも激しくないし つましくやらなきやならな
いわ

男4が現れた。

どうも すみません

いやなに —— お互いに仕方の無い事さ
責任は充分感じています

君が謝る事もないし 僕が怒つたって仕方が無い それに俺はおこる権利もないんだ
これだけは信じてください 僕はふざけた気持ちじゃありませんでした

そりやそりや

はっきり申し上げれば まだ指一本触れた訳でもありません もつと云えば結婚という話も ——

鈴木君 ——

でも すみ子さんがあなたに打ち明けた以上 そうも云つてられません それでこうして ——

浮気というなら俺も怒るが本気なら仕方の無い事さ

最初はすみ子さんの相談相手 或いはこぼしの聞き手のつもりだったんですが 途中からそれじゃ
済まなくなりました 僕はあなたをつらやましいと思いました ただ あなたから奪つてまで す

男 4 女 4
女 4 男 4

男 4 女 4
男 1 女 4

男 4 女 4
男 4 男 1

み子さんを幸せに出来る自信が無かつたんです
鈴木君　自信なんて一人で育んでいくものよ　ね　あなた
君はちょっと黙つていなさい

僕がもし　お二人の仲を割つたんなら責任は取らなければならぬ　そう思いました
せきにんとを取るというと　どういうふうに

上手くいくかどうか判らないけれど　お許しがあれば　すみ子さんを引き受けます　ただし　ぼく
が身を引いてお二人が和解する可能性があるのでしたら　僕が出る幕じゃないような気がします
無理　それは絶対無理

俺は捨てられたんで　彼女は君を選びたいんだ

あなたはどうなんですか

うん　俺は複雑なんだよ　とにかく君は進むにしても引くにしても　君の気持ちを中心と考えたま
え　結婚というのは一生の問題になりうるからね　――　(女4に)君喉が渴いた　ちょっとウーロン茶
でも持ってきてくれ
あら　そうだわね　――　鈴木君は?ビールにする?
いえ　僕もウーロン茶で

(うなづいて)

女4去つた。

男1

男4

男4
男1

男4

女4
男1
女4

—— 鈴木君

はい 何でしよう

云つておくが 僕はだいたい あの女が君のところで女房として上手く納まる確立は少ないと思つてゐる 君でなくて誰の場合でもだ

それは判りません

俺はわざらわしい思いを色々したからね 正直言つて 次のランナーにバトンを渡せれば荷やつかいが無くなるということもあるよ そしてもう一つはすみ子の気持ちだ あんな女だから何処まで確かか判り様がないんだが とにかく君に惚れてる あれはなかなか人を好きになんぞならないんだよ 君さえ承知なら俺は彼女の望みを実現させてやりたい しかし君に押し付ける気もない 俺に遠慮なくどちらか決めて欲しい もちろん返事はすぐでなくていいよ

ええ よく考えてみます

女4、現れた。ウーロン茶を配つて、

私が鈴木君と一緒にになつたら あなた困るわね
何が？

だって洗濯とかお掃除できないでしょ 知つてゐる鈴木君？ この人ね 私が押し込まないとお風呂にも入らないの いつだつたか寝てたときに布団から足が出てたのね 私 靴下を履いてるんだと思つて「寝る時ぐらい靴下脱ぎなさい」つて声掛けたら「穿いてないよ」つて —— よく見たら

垢で汚れて真っ黒になつてたの 足が

そりやす“い

風呂になんか入らなくたつて死にやしないんだ 無駄なんだよ風呂とか掃除とか 他にするべき事はたくさん有るからね

着替えだつてしないし

着替えも時間の無駄だね

俺はパジャマを着たまま下駄つつかけてデパートに買い物に行くよ

その格好ですか

ああ 気に入つてるんだ 何処でも寝られるしね

一緒に歩きたくないわよねえ

でもそこまでモノグサが徹底してたらす“い

だから大丈夫だよ 君が居なくとも 俺は自分のやりたいように暮らす

ご飯はどうするの

自分で作るさ

——あのね鈴木君 ——“いつは今でこそそこの物を食わせるようになつたが

最初の頃は酷かつたんだ 野菜炒めしか作れない しかも辛くて食えない 味噌汁はダシを取らず

にお湯に直接味噌を溶く

だつて仕方がないじゃないの 実家で料理なんかした事無かつたんだもの

だから俺が基本から全部教えてやつたんだ ——俺の料理は美味しいんだぜ

そりやそうかもしれないけど 毎日作るのは大変よ きっと店屋物ばかりになつちゃうわよ

他人の女房になりたいって女が捨ててゆく男の食生活まで気にせんでよろしい

男 1 女 4 男 1 女 4

男 1 女 4 男 1 女 4 男 1 女 4 男 1 女 4

男 4 男 1 女 4

男 1	男 4	男 4	男 4	男 4	男 4	男 4	男 4	男 4	男 4	男 4	男 4	男 4	女 4
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

そうはいかないわよ — 時々洗濯に来てあげるし 食事も作ってあげるわ ね いいでしょ鈴木君 それくらいしてあげても それは構わないですが すみ子さん — 僕はまだあなたと暮らすかどうかも決めてませんし 何云つてるのよ 私この人に鈴木君とのこと打ち明けたのよ もう離婚するのよ あなたと一緒に暮らす決心しちゃったのよ

しかし軽はずみな事はしたくないんです そうでなければ旦那さんに申し訳が立たないし 僕自身も納得できません

そんな事暮らしてみてから納得すればいいじゃないの 案ずるより産むが易しつて云うでしょ だけどこういう事は男にとつて一大事ですし

私の事好きでしょ

それはそうですが

尽くすわよ私 つましく尽くすわ

僕だって前向きに考えています — どうか一二三日時間を下さい よく考えてきます

頼んだよ 鈴木君

はい ではまた後日 —

男4、去った。

なんだか氣の毒な氣がするな 鈴木君

どうしてよ

どう考へても君は主婦向きじやない

旦那向きじやない人に云われたくないわ

そもそもどうして俺と離婚するのに洗濯しに来るだの料理しに来るだの云いだすんだ あれじゃ鈴木君も氣分が悪かろう

それとこれとは別の話よ —— あなたは私が居ないと何も出来ないんだから

そんな事は放つとけばよろしい —— 再婚するんなら 鈴木君の事だけにかまけるべきだよ
ここまで面倒見たのにそういう訳にはいかないでしょ

それが嫌だから離婚するんだろう

だから あなたに振り回されて暮らすのなんか二度と御免だわよ —— ただあなたの身の回りの
世話など引受けてくれる人が私以外に居ると思う? —— あのね鈴木君のマンショソ隣が今
丁度空いているの —— あなたもそこに越してらっしゃい お隣同士なら 私 あなたの世話も
焼きやすいわ

馬鹿も休み休み云いなさい

いい考えと思うけど

君は世間という物を知らなすぎる そんな考えじゃ鈴木君に迷惑がかかるのは目に見えてる あま
り純情な青年をたぶらかすもんじやないよ

そう じゃあ いいのね —— 私がお世話しなくても
いい

男 1 女 4 男 1 女 4 男 1

女 4 男 1 女 4 男 1 女 4 男 1 女 4

男 1 女 4

あとで泣きついでも私知らないわよ
 そんな事はせんよ —— 僕は君の幸せを祈ってる 危なっかしくて見ちゃ居られないが 鈴木君
 がその気になつてくれて君と上手くやつていつてくれるなら 僕はこんな嬉しい事は無い
 私だつて 金輪際あなたの世話を焼かなくつていいんなら こんな楽な事は無いわ

女 4、ウーロン茶を片付けて去つた。
 少年が既に現れていた。

少年 男 1 少年

いいのか 放つといて
 構わん —— なるようになるさ もともと僕は女は苦手だったんだ
 そうだな 面倒くさいだけだ 女なんて —— 博打の方があとくされが無くて よっぽどせいせ
 いすらア
 ああ その通り
 いっちょ やるかい

少
 少年

少年 男 1

お チンチロかい
 (チンブリの中にサイを振つて) ロクだ

男1

少年

男1

少年

男1

少年

男1

少年

男1

少年

男1

少年

少年

男1

確かに見ケンと修練は大事だが 博打は最後には運だ どのタイミングで自分の運を使うかに掛かって
る 小さい勝負ばかりに運を使うと こゝぞの時に痛い目を見るぜ 人には人それぞれの運の総

(同じく振つて) サンだ
じゃ 僕からゆくぜ(振つて)ロクだ

お やるな(振つて)ちくしょう

(振つて) またロクだ

この野郎 調子に乗つてるんじゃないぜ 僕を誰だと思ってやがる(振つて)クソ

黙目だ

(振つて) またロク おい ちょっと待て お前手を見せてみろ

何だよガンつける氣か

隠したって駄目だ 指にタコが見えたよ

ペンダコだろ

ペンダコはそんなところに出来ないよ —— (手を見せて) ほら これだろ

俺のと一緒にするな —— ヘタクソ

俺だってお前の頃には サイコロの田べらい自由自在だったさ —— 歳をとると反射神経も感も
鈍る 運も落ちる

運じゃないぜ —— 博打は見ケンと修練だ

男1 少年 男1 少年

男1 少年 男1 少年

量が決まつてあるんだ そこのバランスを考えないとな
そんなんまどろっこしい事考えてられるかい —— いいか 僕は「の腕一本で世間のやつらを食つ
てやるんだ
そりや頼もしい

戦争に負けてせいせいしたぜ もう横一列になつて戦場に命を捨てなくていいんだ 見ろよ 東京
が丸ごと焼け野原だ うねびうねつたこの台地から何処までも見渡せるぜ 何処もかしこも泥ばつ
かりだ かっぱらい達が泥の上を走り回つてゐる 皆まるで獣のようだ 様を見やがれ 僕はやつと
生きれる場所を見つけた氣分だよ

音楽「きらめく星座」。少年、放歌した。男1も放歌した。

一瞬、奥の間に、上野の闇市の喧騒が聞こえた。

何だあれは

上野の闇市だ 紫色のコテコテに盛つたキントンばっかり売つてゐる
キントンか 昔はあればっかり食つてたな 安いが大盛りでとにかく腹が膨れて屁ばっかりでる
博打のタネ銭を作ろうと思つて あの奥にある買取屋に 親父のフロックコート持つてつたら あ
つという間に盗まれちゃつたよ

男1

少年

あいつらは泥棒集団だ 買い取る振りをして奥に居る仲間の手がさつと品物持つて行つちまうんだ
「馬鹿だな坊や また違うもん持つておいで」って それで終わりだ 誰が坊やだつてんだ
確かにその格好じやな
(ツンツルテンの詰襟を着ていた) 食わなきや食われる世の中だ 僕も食うほうに回つてやるぜ
―― 知つてゐるか 今 上野の山で騒ぎになつてゐるアベック強盗 あれは僕がやつてるんだ
地下道の浮浪児集めて 上野公園のアベックを襲つちまう奇襲戦法だな
ただし暴力は使わない イチャついてるアベックを浮浪児の連中と取り囲んで下着とズボンとスカ
ートを奪うんだ 下半身裸だからな 相手はすぐに金を出す 面白いぜ
終わればショーンベン臭い上野の地下道で 浮浪児たちと祝勝会だ
カストリ焼酎に一味唐辛子を入れて飲むんだ ベロベロに酔つちまうぜ
―― だが酔わなかつた
酔うんだよ 酔いつぶれて地下道で浮浪児達と雑魚寝するんだ (寝た)
(それを見ながら) ―― だが本当には酔わなかつた 僕は浮浪児と一緒に居たが僕は浮浪児じ
やなかつた 親父もお袋も弟も居たし家も焼け残つた 僕には帰る家があつた そうして帰つた
何度も何度も 僕は家に帰つていつた

男1、少年を気にしながら、奥の間に行つた。
三十年以上前の男2、女2、弟が現れた。

男 2 弟 2 男 2 弟 2 少 年 弟 2 少 年 男 2 少 年 男 2 少 年 男 2 少 年 男 2 少 年

— お い 起きろ

起きんか

ん — なんだい (もぞもぞと起きた)
お前 僕に云わなきやならん事はないか
何の話だよ
ちゃんと座らんか

— はい

何処向いてるんだよ お父さんの方をちゃんと見なさい これ (お尻を叩いた)
なんでしょうか

お前 昨日は弟を連れて何処へ行つてたんだ

ああ — (少しうつたえた) ええと 八百戸のタカちゃん達とトンボ取りに行つてたつけ

(弟を見た)

(下を向いて泣きそうな顔をしていた)

な そうだったな

(コクンと頷いたが、嗚咽が漏れた)

(弟に) 本当か

() 嘸咽を漏らしながら、コクンと頷いた

だつたら何故泣くんだ

（ブンブンと顔を横に振った）

嘘をついとるから泣くんじゃないのか

（ブンブンと顔を横に振った）

夜の七時を過ぎるまで トンボを取つてたつて云うんだな

（コクンと頷いた）

俺が悪いんだよ こいつは「帰ろう」って俺の袖を何度も引っ張つたけど 俺がグズグズと帰らなかつたんだ

そうか それならそれでよろしい では本件に入ろうと思つが もう一度聞く お前俺に云わなきやならん事は無いか

—— 特に無い と思う

本当に云わないと お父さん恐いんだからね

—— ああ

あさつて 谷中の墓参りに行く手筈になつておるんだが その時に着てゆく着物の虫干しをしようと思つてだな 母さんが箪笥の引出しを開けたんだが着物が無い おかしいと思つて上から順に引出しを開けてみたが 一枚も着物が無い 箪笥の中が空っぽになつておつたんだ —— お前 着物が何処へ行つたか知らないか

—— 知りません

本当にか

本当に知りません

少年 男 2 少年 男 2

男2 女2 男2 女2

お前 嘘をついてるんじゃないだろうね
お前は黙つておれ
だってお父さん このはしょっちゅうお父さんのお財布から —
黙らんか — こつは知らんと云つておる そうだな
—— (頷いた)

そうだな

知りません

うん では泥棒だ —— 後で巡査に届けよう

白状するなら今のうちだよ 巡査に届けられたら 困る事になるんじゃないかい もしおまえだつたら ウチの恥だよ

—— (下を向いたまま 笑つていた)

男2 少年 男2 少年 男2 少年 男2 少年

何を笑つてるんだ
だって なんだかおかしいや

何がおかしい
なんだいそんなムツかしそうな顔をして 母さんもそんな困つた顔して ——

お前 お父さんに向かつて ——

殴ればいいじゃないか 本当はそう思つてるんだろ 僕が着物を取つたつて —— そうだよそのとおり 親父さんとお袋さんの着物全部僕が質屋に入れちまつたんだ 本当に嘘つきのロクデナシなんだよ 僕は —— それなのになんだい 仏頂面してちゃんちゃらおかしいや

男2
少年

男2
少年

少年

男2

少年

男2

少年

男2
少年

(立ち上がった)
殴られんのは慣れてるんだ ちつとも怖くないや —— 親父さんは俺に何を望んでるんだい 立派な兵隊になつて欲しいかい そうしてお国の為に見事に散つて欲しいかい このまま行けば望もうが望まなかろうが いずれそのコースに俺もゆく —— でも俺はそれまでは 自分の好きなよう にジタバタしたいんだ 俺は俺の出来そこないのコースを行くしかないんだ

お前のやり方なぞ 俺は認めんぞ —— チンピラめ

元海軍将校様はそんなに偉いのかい 軍人恩給を貰つて生きるのはそんなに立派な事かい その恩給のお陰で私達は暮らしてゆけるんじやないか お父さんはね若い時にもう一生分の仕事をしなすつたんだよ

何もする事がなくて オバケナマズみたいにこの家に逼塞してり —— 俺が小学校の一年生の時 毎日教室の後ろで授業参観してたよな あれがどんなに恥ずかしかつたが知つてるかい 俺は教師を監視しどつたのだ 教師が口クでも無い下らん事をお前達に吹聴したりせんか 見張つておつたんだ —— 何が義務教育か あんな下衆どもに自分の子供がまかせられるか じゃあんんで俺の宿題の図画工作を取り上げて 自分で作つたりしたんだ

お前の作った工作など見ちゃおれんからな —— お前如きに何が作れるつて云うんだ

あんな立派な国會議事堂の模型を学校に持つていける訳が無いだろう

貴様 あの模型を捨てたんじゃあるまいな
捨てたよ —— 小学校の子供にあんなものが作れる訳が無いだろう
お前という奴は 誰の為に俺が精魂込めて作ったと思ってるんだ

少年
男2

少年
男2

38

それがトンチンカンだつて云うんだよ

減らず口を叩くな —— 僕はな 死んだ親父が残した借金を返しながら弟達を学校にやり就職先を見繕つてやつた 妹達の嫁き先も全部世話してやつた —— 全ての片がついて こいつを嫁に貰つた時は四十を既に越していたんだ 僕は青春を家兄弟の為に棒に振つたが お前には俺が成そうとして成せなかつた「人物」になつて欲しかつたんだ 海軍も世間の奴等も皆下らん連中ばかりだ陛下閣下の聖戦にかこつけて商売のための戦争をしくさつておる —— 僕がそんな戦にお前を無駄死にさせようと考へていたと思うか 耾を知れ

親父さんの思惑がどうだらうと この戦況下じゃ俺達は日々死ぬんだ 学校の先生達は少年兵の志願を募つてる おれはさりさりいく氣はないが いくらのらくらしてたつて早いかおそいかの差でしかないんだ ——

そだとしておまえのやつておる無軌道が許されると思つか 僕は認めん 僕の律に従わん奴はこの家に居る資格など無い 今すぐ出てゆけ

本舞台の明かりが消えると、それを見守っていた男1が、闇の中に浮かんだ。

男1

親父にそう吐き捨てられて 僕はすぐに家を飛び出しだが 行く当てなどあるはずも無い 近くの神社の横手にある石碑の裏に暫く寝転んだ が またすぐすくと田舎まで引き返し 開いている扉から自分の部屋にこつそりと忍び込んだ ——

本舞台に明かりが入った。
少年がそうっと入ってきた。弟が現れた。

兄ちゃん

なんだお前 まだ起きてたのか
うん 母ちゃんがこれ兄ちゃんに渡してこいつて（サツマイモを出した）

お 済まんな（かぶりついた）
(横に座つて) — 昨日行つた金竜館の入場料 あれ父ちゃんと母ちゃんの着物売つて作つた
んだね

馬鹿 お前がそんな事気にすんな

だつてさ

お前は日曜だけだろ 僕は学校さぼつてほとんど毎日だからな 自分の為にやつてるんだ どうつ
て事ないよ

ふうん

お前 健かつたな

なにが

だって喋んなかつたろ 浅草の事 親父さんに

男と男の約束だもんね

いつも前だな

少年 弟 少年 弟 少年 弟 少年
少年 弟 少年 弟 少年 弟 少年
少年 弟 少年 弟 少年 弟 少年
少年 弟 少年 弟 少年 弟 少年

弟 少年 弟 少年 弟 少年 弟 少年 弟 少年
弟 少年

もう三年だからな
また来週行こうな
うん
シミキンと有島一郎 ビッチがいい
有島がいい
やつぱりかい
有島一郎はすごい 時々 本当に気が狂ってるんじゃないかなって思うよ 菊五郎より桂文樂よりす
ごい

そうだな 有島は今一番乗ってる —— まるで自分の死ぬ時が判つててやつてるような身の入れ
方だ
—— 兄ちゃん アメリカの飛行機がやつてきたら この家も燃えちゃうのかな
さあな 燃えるかもしんねえな
来月から僕 学童疎開だって —— 今日学校で通知書貰つてきた
本當か

うん —— 埼玉県のナントカっていう山寺なんだ
そうか —— 僕の中学も軍需工場に動員をかけられるって噂だ 暫くは離れ離れになるな
—— 学童疎開に行つてる間にこの家が焼けて皆死んじゃつたら 僕どうしよう
防空壕があるから大丈夫だよ —— 誰も死にやしないさ
うん

少年
弟

帰ってきたら また浅草一緒に行こうぜ
うん

少年、立ち上がりて、手を振って唄った。

♪見よ東海のばかやろう
旭日高く ばかやろう

弟も一緒に「♪」を振って唄った。

♪天地の正気 ばかやろう
希望は踊る ばかやろう

警報が鳴った。

二人、不安げに空を眺めた。弟、去った。

男2が現れた。大きいシャベルと小さいシャベルを持っている。

おい サイパンが陥ちたらしい いよいよ本土決戦だぞ
そうみたいだな

男2

どいつもこいつも クソツタレばかり揃いおつて —— おい穴を掘るぞ 手伝え (小さくシャベルを差し出した)

え 何をするつて

穴を掘るんだよ —— ここの三畳間の下に

防空壕なら 隣組の大きな共同壕があるだろう

そんなものは関係ない —— (シャベルを突きたてた) ええいくそつ (土くれを放り出した)

— (果然と見ていた)

何をぼさつとつ立つておるか お前も手伝え

あ ああ —— (と男2の隣へ)

(掘りながら) 昨日 馬場が来おつた

(手伝いながら) ああ海軍の同期生の
海軍省で指揮官を募集しとるらしい

へえ

戦局も大分苛烈になっておるからな 指揮官が足りんのだと云つておつた

まさか親父さんを誘いに来たんじゃないだろう

誘いに来たんだ —— 若い奴らは集められても 経験の深い将校はすぐにはできんからな 退役

将校で複官を希望する者があれば すぐに許されるらしい

それで ——

ふん

男2少年

男2少年

男2少年

男2少年

男2少年

男2少年

少年
男 2

どうする気なんだい
どうも「うもないさ

（シャベルを突きたてた） ええいくそつ（土くれを放り出した）

女 2 が現れた。

お父さん —— 置上げて何してるんです

穴を掘るんだって

防空壕なら隣組のがあるじゃないですか

関係ないんだってさ

馬鹿にしやがって —— 僕に輸送船の指揮官など —— 老骨だつて輸送船ぐらい動かせるだらうだと —— 馬鹿にしやがって ——

男 2、 獣のように穴を掘った。

少年も手伝つたが、 男 2 の激しい様子に気圧され氣味だ。

止してくださいお父さん それでなくともガタが来てるのに 穴なんか掘つたら家が潰れちまうわ

よ

男 2

うるさい 一一一は俺の家だ 僕がどうしようと俺の勝手だ
そりやそうんですけど —— あたし達だって住んでるんですよ

男 2 女 2 少年 女 2 少年 女 2

お前達の事など 僕は端から認めちやおらん
(少年に) お父さんを止めさせるんだよ
どうやって
どうやっても止めさせなきや
だけど見ろよ あの親父さんの顔 —— あんな獣みたいな顔 初めて見た
馬鹿云うんじやないよ

女 2、走り去った。

男 2

少年

(掘りながら) —— ええいくそつ 六根清淨 —— 六根清淨 —— ええいくそつ —
この三畳間でおコウが死んだのを知つておるか
おコウさん? —— ああ簞笥の上の壁に掛かつてる写真の人だろ

チエロ弾きになりたいと云つておつた 小さい時に事故で片足を無くしてな 義足で嫁に行かんだ
しかしチエロ弾きにもなれずここで自殺しあつた 馬鹿な奴め —— フウ公は隣の六畳で死
んだ 許婚も居つたんだがカリエスが長引いて助からんかつた —— 親父は奥の八畳で死んだ
卒中でな 僕は艦に乗つていて電報を貰つて帰つてきた だいぶ経つてからだ 線香をあげてから
見ると八畳間の畳に血の痕があつた 僕はまだその色を憶えてるよ —— お袋は長四畳の縁側が
好きだった お袋がいつも座つていた座布団に腰掛けると なるほど風が奥の濡縁を廻つてやわら
かく吹いてくる お袋はその座椅子に座つたまま眠るように死んでおつた ——

少年
男2

古い事だろ
古い事だが
ええいくそつ

一度あつた事は もうどうしたって永久になくなりやしない
ええいくそつ 六根清浄 ええいくそつ 六根清浄 —

人魂のように、この家で亡くなつた人達の遺影写真の額縁が飛び交つた。
男2の穴掘りを応援するかのように、「六根清浄」と掛け声を合わせた。

少年、氣味が悪くなつて、逃げ出した。

男2

亡靈達

亡靈1

男2

亡靈達

亡靈2

亡靈3

男2

亡靈達

亡靈4

亡靈5

ええいくそつ

六根清浄！

三畳間の下に深さ一間の穴が掘りあがつた

ええいくそつ

茶の間の六畳の下に深さ一間半の穴が掘りあがつた
仏壇と床の間にあつた祖父の胸像をその穴に運んだ
ええいくそつ

六根清浄！

玄関脇の六畳に階段状の出口が掘りあがつた
庭の植え込みは残らず泥の下敷きになつた

男2

亡靈達

亡靈6

男2

亡靈達

亡靈1

男2

亡靈達

亡靈3

男2

亡靈達

亡靈4

男2

亡靈達

亡靈5

男2

亡靈達

ええいくそつ
六根清浄！
穴の掘り方に計画性が乏しくなつた
ええいくそつ
ええいくそつ

六根清浄！
ハ置から奥の長四置を突き抜け裏木戸まで掘り進んだ
大きな空襲が二度あつたがそれをも省みず掘り進んだ
ええいくそつ

六根清浄！

周りの家並みの大半が焼けたが この家は焼けなかつた
家の下は土台の部分を残して ほとんど空洞と化した

ええいくそつ

六根清浄！ そうして戦争が終わつた —

亡靈達、 消えた。
男2、 果然と何んだ。

男2
—— なんてこつた —— 出陣しなければ —— (奥に) おい 誰か居らんか おい —
だれか 僕の服を出せ

女2が現れた。（現在の姿である）

どうしたんです

俺は出陣せねばならん 軍の一級礼装とサーベルを出せ
何処に出陣するんですって

皆を呼べ 今生の別れになるやも知れん
(男2の着ている物に気がついて) お父さん 何を着てるんです そんなもの何処から引っ張り出したの

早く呼ばんか (シャベルを振り上げた)

(奥に) 皆 来ておくれ お父さんが変なんだよ

男3、女1、男1が現れた。

なんだい こんな時間に

(既に茶卓に座っていた) 皆 一いっうちに来て座れ 俺の話を聞け

全員席についた。

男 3 男 2 女 2
男 2 女 2 男 2 女 2
男 2 女 2

男 2	女 2	男 2	男 1	男 2	男 2	男 3	男 2
女 2	男 2	女 2	男 1	女 2	男 2	女 1	男 3

男 2	女 2	男 3	男 3	男 2	男 2	男 3	男 2
女 2	男 2	男 3	男 3	男 2	男 2	女 1	男 2

俺は出陣する事になつた
出陣つて何処に

陛下閣下が危険に立たされておる 俺はこれから皇居に出向かねばならん
正月でもないのに 皇居に入ってくれるわけが無いだろう
馬鹿者 陛下閣下の危機だと云つておるだろう この緊急事態にそんな事を云つておる場合か
おじいちゃん 緊急事態つていつたい何の事
熊が現れたのだ

皆 顔を見合わせた。

お前らは気がつかんかったのか さっき家の庭でもゴソゴソ這い回つておつた 奴らは 皇居を
占拠するつもりらしい 手遅れにならん前に 陛下閣下に注進せねばならん いざとなれば俺も
戦う覚悟がある これが今生の別れになるやも知れん

そうか そりや大変だな

(女2に) おい 軍の一級礼装とサーベルはどうした

そんな物 もうとうにありませんよ

なんだと

もう無いんです

お前 サーベルも無しで俺に熊と戦えと云つのか

男1

男2

男1

男2

男1

男2

男1

男2

男1

男2

男1

男2

男3

男1

男2
男1

すまん親父さん そいつは確か俺が子供の頃に闇市で売つ払ちまつたんだ
お前という奴は —
まさかこんな事態が来るとは思つても見なかつたんでな
おじいちゃん お茶でも淹れましようか 喉が渴いたでしよう (立つていつた)
いらん クズ共め — 皆でよつてたかつて俺の事を馬鹿にしあつて —
誰も親父さんの事を馬鹿にしてなどいないよ 只俺達は やつぱり親父さんの云つようつに どうし
ようも無いんだ
そうだ お前達は本当にどうしようもない — この格好じや陛下閣下に合わせる顔も無い
親父 話が終わつたんなら俺は戻るぜ — 明日も朝が早いんだ (立どうと)
まだ何の話も終わつちやおらん 座れ
勘弁してくれよ (座つた)
そうこうしておる間にも熊が皇居を占拠しあるんだぞ 俺はこの格好でも行かねばならん —
しかしその前に遺産の事を話さねばならんだろう
いつたい何の話しだよ
聞け 遺産は俺が死ななきややらん お前達はもう貰つたつもりになつてゐるようだが 法律では
女房に半分 他の半分を息子二人で分ける だがこんな事は揉め事になりがちだ 俺は遺書を作ろ
うと思う でお前達に相談するんだ この際 この件に関する意見を一人ずつ云いなさい
意見なんか無いよ 遺書は親父さんの考え一つで作るもんだ
だが揉める 後でお前達が嫌な思いをする

男
1

男
3

男 3

四

女
2

50

女 2 男 3

男 2 女 2 男 2

揉めるほどの遺産じゃない悪いけど
——俺が親父の土地を担保にして 家を新築した事への嫌がらせか ——
俺はその事についてやどうの「うの御託を並べる気は無いぜ
俺は親父が承諾の上で この土地に二棟新築したんだ —— 親父達の面倒を見る為にだ
何處に文句がある

文句なんかありませんよ 構つてももらいたいだけなのよ
お前は黙らんか

皆お父さんの為を思つてやつてくれて いる事なんですよ どうしてそれが判らないんです

女1が、お茶を運んで現れた。

だってお母さん おじいちゃんはこの家の艦長さんなんだもの 部下に命令するのがお仕
事
—— パパもそこはわかつてあげなきや
度が過ぎると こつちがノイローゼになるんだよ
そうだわよ 敗戦で軍人恩給が切れた時だつて 私が働きに出るのが気に入らないからつ
尽な事ばっかり云つて
商売など下卑たことをさせる為に お前をこの家の嫁にしたんじゃない
見入りも無くてどうやつて食べてゆけたんです
お前の稼いだ金など 俺は認めておらん

女1が、お茶を運んで現れた。

女2

男1

男3

男2

男3

男2

男3

男2

男3

男2

そりや お父さんは草を食んでも貧乏に耐えられるか知れないけど 私達には無理です 皆飢死にしてましたよ
まあなんにしても親父さんは偉いよ 僕が生まれてから一度も働かなかつたんだから 誰も真似なんか出来やしない
おい からかうなよ
からかつちやいないさ 僕は心の底からそう思つてる —— 世間の奴らは何処かでおのれを殺して稼ぐために走り回つてばかりだ 僕もそうだしあ前だつて お袋さんだつてそうに違ひない
だが親父さんはずっと自分の誇りを捨ててないぜ 誇りを捨てずに生きるつて事は並大抵ぢやない
んだ 誰も親父さんの生き方をなめられる奴なんて居やしないんだよ —— 親父さん遺産の事だが 僕のほうはまあ大丈夫だ 僕は子供を作らなかつたからな それに僕の商売は退職金も無いけど定年も無い 弟の子にゆくゆくはバトンが渡ればいいさ
お前が良くても そつちはどうだ
—— 僕は兄貴と違つて給料を貰つて生きている身だからな こここのローンも定年過ぎまで払わなきやならんし娘だってこれから物入りだ 兄貴みたいにかつこいいことなんか言えやしないよ
だからどうなのだ
だから遺産がどうのじゃないんだ —— 僕には仕事がある 明日も朝が早い 親父さんの御託に付き合つての暇などないんだよ (立ち上がつた)
待たんか

男 2 女 1 男 1 女 2 男 2 女 1 男 1 女 1 女 2

男 3 去つた。

おい あいつを連れて来い
(立つて) 「めんなさいね
もう構わんよ —— 後は俺が話を聞くとくから
そう お願いお兄ちゃん

女 1 去つた。

お袋さんももう寝なよ —— 俺 ちょっとと親父さんと一人で話がしたいんだ

いいのかい
いいよな 親父さん

気に入らん 皆 何故俺の話を聞かん

俺が聞くよ

ふん
じゃあ 私も寝かせてもらいつよ —— ビうせすぐに起されんだらうけど

女 2 お茶など片付けて去つた。

どうしようもない奴らばかりだ 家の連中は
しかしね 親父さんは苦労して それでいいんだ

家長なんだからね 偉い奴は損なことや苦しい事を引き受けるんだよ
—— そう思うか

ああ

俺が苦労すりやいいのか そうか

九十九の祝いがあつたろう

—— 何

九十九の祝い 何でいつたつけ

ああ —— 白寿だな 百と言つ字から一本とるんだ すると田という字になる

後四年だな

秘密なんだが 考えている事があるんだ 百歳になると区役所から長寿の祝いに百万円もらえる
白寿じやだめだぞ 九十九だから しかし白寿を二日でも三日でも越せば百だからな それでお上
から頂戴したら アヤに贈ろうと思う

弟の子にか そいつはいい

学資にな 少しは助けになるだろつ

きっと喜ぶだろうよ

哀れなもんだなア

—— 孫に何かやるにも百まで生きなきやなうん

男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1 男 2 男 1

男1 男2 男1

—— 親父さん しばらく俺と一緒に暮らすか
なんだと

実は俺 離婚したんだ

お前そいつは —

一月ほど前にね — カミさんは今 若い男とよろしく暮らしてるんだ 俺も晴れて独身に戻つたって訳だ

馬鹿者（男1の頭を殴つた）

痛テ

どうしようもない奴だとは前々から思つとつたが — 嫁を寝取られるとは不甲斐ないにも程が

ある

いやお互に協議の上のことなんだ 俺もカミさんもこれでせいせいしてゐるんだ
お前はウチの血筋を終らせる馬鹿者だ

弟の方があるだろう

あいつは嫡男ではない

まあ仕方の無い事さ — カミさんと続いてたつて子供は駄目だったんだ ナルコレプシーの薬の作用で体がガタガタだしな 父親にはなれん — 俺は一生息子のままだよ

俺はお前を食わせる訳にはいかない

俺が食わせる — 親父さん 俺の巣に来いよ

行かん — お前はギャングをやつて食つとるのだろう そんな奴とは暮らせん

男1

男2

男1

男2

男1

男2

男1

男2

男1

男2

男1

男2

どうした 小便かい？

—— また庭に熊が来とる

男2、奥の闇を睨みつけた。

—— そうか
お前なんぞと暮らすなら 僕は養老院へ行く

どうして

—— 皆で相談しておつたんじゃないか 僕が邪魔なんだろう

そうじやないさ —— 只 皆疲れてるだけなんだ 誰も親父さんを邪魔者なんて思っちゃいない
よ

ちくしゅう どうして俺は死なないんだ —— こんな悔いてばかりの人生 いつそ終つちまつた
方がどんなに楽だか知れん

弟の子の為に百まで生きて金を贈るんだろう

—— ああ そうだ —— せめて百までは生きんとな それに —

それに なんだい

幾つになつても死ぬのは 恐い —

男2、立ち上がつた。

男 1 女 3 男 1 女 3 男 1 女 3 男 1

男 2 男 1

シャベルを握つて、一步踏み出した。

「この格好でも仕方あるまい—— 皇居が占拠される前に陛下閣下に早く御注進せねば——

—— 親父さん ——

男 2、奥の間に消えた。

カーン、カーンと太鼓のような音が聞こえた。

女 3 が、奥の間に立っていた。

誰です

しらばっくれちゃ嫌ですわ

—— 親父が熊退治に行きました もうこっちには帰つて来ないかも知れません
「立派です事

あなたとは随分昔からの知り合いだったような気がします—— 遠い昔 月の無い夜の山奥で出
会つたような気もします 海の中でもがく俺の足を引っ張つていたような気もします
おいたを云つちゃア困りますよ

いつかは俺も親父のよう連れて行かれるんですか

ゆめゆめ許される事じやござんせんものねえ（南天の実を投げた）

痛テ 何が許されんのです

男 4 男 4 男 1 男 1 男 4 男 1 男 4 男

男 1 女 3 男 1 女 3

お庭の南天の実を幾つも幾つもお「ぼし」になつて（投げた）
痛 そんな事をした憶えはありません
しゃがんで見ておりましたもの ゆめゆめ許される事じや「せんせんからねえ」（投げた）
痛い — 止してください 南天の実を投げるのは — 痛 痛い —

女 3、姿は消えていた。太鼓の音も消えていた。
男 1 はまだもがいでいる。

男 4 が現れた。

あのつ

（まだもがいでいる）

大丈夫ですか

わ 誰だ君は

鈴木です

鈴木君？

ええ —

随分うなされてましたよ

持病なんだ

— 眠るといい幻覚を見ちまうんだ

— でもどうして君がここに居る

はい 不躾にお邪魔してすみません

男 4 男 4 男 4 男 4 男 4 男 4 男 4 男 4 男 1

—— いつたい何だね
それが —— すみ子さんが 昨日から帰つて来ないもので もしゃ 「ちら」と思いいまして
いや来ちゃいないが —— きっと何処かで飲み歩いてるんだろう —— あいつは夜遊びが好き
だからね

それならいいんですが —— 昨日家に帰つたら テーブルの上に「『めん 鈴木君』て一言だけ
書いた置手紙があつたんです
なんだって

(出して) これです

(見て) —— 実家には電話してみたかね

はい 向こうには居ませんでした

じゃあ 姉貴たちか妹の所かも知れないな

それも当たりましたし 友人関係も当たつてみたんですけど 何処にも居ないんです

相変わらず 困った奴だな ——

只の気まぐれだつたらいいんですけど もしかして ——

おいおいどうした

もしかして 僕が力不足だんでしょうか

そんな事は無いだろう 君は若いんだし ギャンブルだつてしない 真面目一筋なんだろう ——

あいつはずつとそんな男と結婚したいって云つてたんだからね

そりやそうですが —— いざ一緒に暮らしてみると すみ子さんにはつまらなかつたのかも知れ

——僕が彼女のする事に意見したのも気に入らなかつたのかも知れません
あいつと暮らせば意見の一つもしたくなるさ——早速何かやつたのかね

あいつと暮らせば、意見の一つもしたくなるさ——早速、何かやったのかね
十日ほど前給料袋を渡したんです

そつくりそのままかね

家計の遣り繰りは奥さんがするものだとばかり思い込んでいましたので――

男
1

男
4

8

男
1

俺もその点では重々意見したんだがね——家計簿なんか一度もつけた事が無いし——だいたいバランスを考えて金を使う事を知らないんだから困っちゃうんだ

男
1

四

のヒテオニレクシソ、おまけに病氣のせいもあるんだか、一日六食食っちゃう、夫婦揃って金銭感覚が覚束ないもんだから、貯金も出来ない、このまま行つたらどの道破滅だつたんだ——俺たちは君みたいな奇特な若者が現れるのを心待ちにしてたんだよ

僕が奇特な若者ですか

男
1

いや 別に深い意味は無いんだ —— しかしあんな女でもきっと操縦方法はある 一邊には無理かも知れんが 君ほどの情熱があるんなら 少しづつおやかな女になる可能性はあるよ（肩を叩

男 1 男 4

男 4 男 1 男 4 男 1 男 4 男 1 男 4

いて）な 僕は君に期待してるんだ —— きっとすぐに帰つてくる —— と思う —— 僕も心当たりに電話してみるから しばらく待つてあるといよ

—— はあ

そう気落ちしなさんな

なんだか腹が立つてきました

なんだって

僕はなんだかあなたの手玉に取られてるような気がします ——

そんな事はないだろう

だって あなた なんだか嬉しそうじゃないですか —— 前に云いましたよね すみ子さんは誰と暮らしても上手くいくような気がしないって それはあなたの自信の裏返しの言葉だつたんじゃありませんか

あのね鈴木君 —— 僕とすみ子は十五も歳が離れてるんだ おまけに僕は肝臓腎臓血圧糖尿ナルコレプシーと病気のデパートみたいな体だ どう考えても僕はすみ子を置いていく事になるだろう僕には彼女に残してゆく財産もなければ こんな体だから生命保険にも入れない —— 彼女は知つての通り金銭感覚が無い 働く術も知らないし 何より何事に関しても根気と努力という事が欠如している —— そんな女がこの世を一人残されて生きていくかと思うかい どうしたつて君のような男が必要だったんだ

—— 一月暮らしてみてどうだい あいつとやれそつかい

男4

男1
男4

男1

男4、去った。

—— 僕はすみ子さんを愛しています その気持ちに偽りはありません

あいつがどんなに放縟でもかい そんな事も愛嬌のように思えます —— ただ 彼女の気持ちを彼女自身が量りきれないような

のだけが気掛かりです

手を引っ張つて強引に走り出せば きっと付いて来る

強引にですか ——

そう 強引にこううつちやつてね

相撲ですね

そうそう —— 僕はもう疲れた

あ すみません 突然来てしまいました

いや そういう意味じやないよ

いえ 僕はもうこれで —— 何か判りましたら「面倒ですが連絡お願いします 僕の方でも連絡を入れますので

うん ——

では失礼します

—— やれやれだな 全く —— 親元でも姉妹の所でもないとすると ——

女4

二二二よ

女4が現れた。

ゲツ どうして君が俺のところに居る
鍵まだ持つてるもの
隠れてたのか

洗濯してあげようと思ったのよ

馬鹿 鈴木君血相変えて君の事を探してたぞ どうして出てこなかつたんだ
だって 私が居なくて誰があなたの死に水を取るのよ

あのね君 —— きみから云いだしだ事なんだぞ 俺と別れたいって鈴木君と結婚するつて
まだ一月しか経つてないんだぞ 君が再婚して

試験結婚だから まだ籍は入れてなかつたもの

そういうことじゃない 君は眞面目な青年の純情をいたぶるつもりか —— それにだいたい何故
俺のところに来る 帰るんなら実家が相場だらう

だから洗濯してあげようと思つて

この際洗濯はどうでもよろしい —— 鈴木君 今出たところだ 行つて謝つてきたまえ

(首を横に振つた)

君には行く義務がある

男1 女4 男1 女4 男1 女4 男1 女4 男1 女4 男1

（首を横に振った）

君のせいで鈴木君が女性不信になつたらどうするつもりだ

（首を横に振った）

鈴木君の事が好きなんだろう君は

（しつかり頷いた）

だったらどうして――

後で鈴木君に電話するわ　この人は三年以内に必ず死ぬから　それまで待つててつて
なんだと

だつてそんな体で長生きするわけが無いものあなたきつと持つて三年よ　それまで私我慢してあなた

の面倒見ようつて決めたの――　鈴木君との生活はそれからでも遅くないわ

嫌だ　もう俺は君と暮らしたくない　とんでもない奴だな君は　俺は死なんぞ　絶対君より長生き

してやる

そんな事云つたつて駄目よ　さつきも鈴木君にそついつてたじやないの「俺はすみ子を置いてゆく事になるだろう」って

盗み聞きしてたのか

もちろんだわ――　私が居ないとこりであなたが鈴木君にある事無い事云うもんだから　思わず

飛び出しそうになつたわよ

ある事ばかりしか云つとらん――　いいか俺たちはもう役所に離婚届を提出したんだ　俺の巣に君が居る事は絶対認めん

男1　女4　男1　女4　男1　女4　男1　女4　男1　女4　男1　女4　男1　女4

じやあ通いでもいいわよ 確か斜め向かいのマンションに空き部屋が出てたはずだわ
斜め向かいのマンション、

だから家政婦さんでしょ私 — 斜め向かいのマンションからここに出勤してくるわけよ
斜め向かいのマンションつて — 君確かあそ「は」こと段違いの高級マンションだぞ

離婚した君の為に俺が高級マンションを借りなきやならん

だつてここに居る事は絶対認めんつて云つたじやないの——それに家政婦さんなんだから給料もちゃんと払つてね

君の云つてゐる事が世間に通用すると思つてゐるのかい

世間じやなくて あなたに云つてゐるの 私は
つましく暮らしたひつてひつてたのは可逃の

それは鈴木君との事で あなたとは無理

俺はたつた今憤死しそうだ
そうなつた三日も持てず二階ひつみ

君を殺して俺も死ぬ

嫌よ あなたと一緒に死ぬなんて真つ平
——
死ぬまでせいぜいお稼ぎなさいよ
鈴木君と生活
するのに持參金も無しじや恥ずかしいんだから

男1、ヘナヘナと座り込んだ。

どうしたの また発作？

なんだか精も根も尽きたみたいだ

お腹がすいたのね — 待つて 今何か作つてあげるから

女4、ハナ唄を唄いながら去つた。

男1、「ろりと横になつた。

やけになつて、天井に向かつて放歌した。

♪見よ東海のばかやろう

旭日高く ばかやろう

男3が現れて一緒に唄つた。

♪天地の正氣 ばかやろう

希望は踊る ばかやろう

転寝してたら風邪引いちまつぜ 布団敷いてやるよ

男3、布団を持っていた

男1 お おう —— 済まんな

(敷きながら) 懐かしいな 今の唄

男1 ハハ —— こんな唄 戰時中はでかい声で唄えなかつたな

男3 嘆つたよ 浅草からの帰り道 僕が泣きそつになつて歩いてると 兄貴がでかい声で唄い出すんだ

男1 やけくそで

男1 そうだつたかな

男3 そうだつたんだよ それで俺もつられて唄い出すんだが 結局はファファ泣きながら帰つてきたん

男1 だ ここに —— 寝ろよ

男1 ああ すまん(布団に入つた)

男3 もう随分長い事行つてないなア 浅草も

男1 俺はいまだに時々行くがね —— 仕事柄もあるし 腐れ縁の奴らもしづく生き残つてゐのが少

し居る

俺は結局兄貴ほど深入りしなかつたものな

男3 変わり果てて見る影も無い —— それでもつい踏み込んじまつのは —— 俺が女々しいからだ

男1 ね どうも過去にばかり執着しちまつ

男3 学童疎開を行つてただろう俺

男1 丁度空襲が激しくなつた頃だな

男3

あの時疎開先の山寺から 東京の町並みがよく見えたんだ 大空襲も先生や級友達と眺めてたんだ
ぜ

そりやきっと「ゴージャスな眺めだったろうな こつちは阿鼻叫喚だか
固睡を飲んで眺めたよ — 僕の家が焼けないかなって

おいおい

仲間内で賭けをしてたんだ 焼けた家の奴に一人芋一本 — 四六時中腹が減つてたからな あ
の頃は 僕の家が焼ければいいって思ってたんだ

そりや残念だつたな

中には一度焼けて 移つたところでまた焼けてなんて奴も居たのにな — この家は焼けないん
だよな

ああ 隣の家まで焼けたのにな

兄貴達はどうしてるだろうって思う腹で家が焼けてくれって考えるのはちょっとスリルだったぜ
しぶといんだよ 家も家族も

— 僕も布団に入つていいか

え — おいよせよ お前は団体がでかいんだから

(入つてしまつた) いいだろ 昔はこうやってよく寝たじやないか

馬鹿 僕が布団からみ出るだろうが
(構わぬ) 僕は兄貴が怖かったよ

なんだって

男1 男3 男1 男3 男1 男3 男1 男3 男1 男3 男1 男3 男1 男3

男3

学童疎開から帰った頃さ――兄貴はまるで獣のような目になつてた 博打場を走り回つて たまに家に帰つてくる時も獣が体を休めに来る様だつた――俺はもう一度と兄貴と浅草へ行けないと思つちまつた

あの頃は誰だつてそんな目をしてたさ

俺は違うんだ――俺には兄貴みたいなあんな目つきはできない 親父のようにもなれない――

俺がこの家の中にいて どんなに兄貴がうらやましかつたか 判るかい 俺には苦笑しかできない―― どうにも仕様がないつて 親父を施設にいれる事しかできなかつたんだ

俺のせいか――

いや 兄氣のせいじゃない――苦笑を教えてくれたのは兄貴だが 兄貴から教わらなくたつて

俺にはどのみち苦笑しか出来なかつたんだ――すまん兄貴 俺はとんでもない事をしちまつたなア

親父さんは大往生したぜ

俺が施設に入れたせいだ――一週間であんなに弱つちまうなんて――ちくしょう

まあ ともかくにもここに戻つて死ねたんだから 親父さんも本望だろう

親父 云つてたんだ 百まで生きたらアヤに百万円やるんだつて

俺も聞いた

口惜しかつたろうな

本当はな――俺がここに帰つてきて一緒に住んでやれば良かつたんだ――獣だなんてとんでもない 俺は自分の保身のことばかり考へてる 親父と住んで仕事ができなくなる事が怖かつた

男1

男3

男1

男3

男1

男3

男1

男3

男1

男3

男1

んだ —— あの頃女房の奴と離婚騒ぎがあつて 僕の巣に引っ張り込もうとしたんだが 無碍もなく親父さんに断られたよ 内心どんなにホツとしたかわからん 親父の人生つていいたいなんだつたんだろうな —— まるでトンマな。ピューリタンだ 僕は親父の仕事を目の当たりに見たぜ

親父の仕事?

お前が疎開した頃だ —— ほら憶えてるだろう 家の下の穴

ああ —— あのやたら広い防空壕か
ありや防空壕じやない ——

なんだか訳がわからんがな —— 僕は凄いものを見た —— あれ以来僕は親父さんに頭が上がらん —— いつまで経つても息子のままなんだ ずるいな兄貴は

何が

兄貴ばっかり そんなものを見て —— 僕も見てたら 兄貴みたいになれたかも知れなかつたな そう云うな —— お前はお前だろうが

—— 僕は僕か

目をつぶるといまだにあの頃のお前の顔が目に浮かぶよ —— 殴れば泣くし 歩けばあとをつけ てくる 弟ってのはそんなもんだとばかり思つてたが 家族を養つて立派に巣を作つてる —— 僕が出来ん事をお前はやつてるよ

男3 男1

男3 男1 男3 男1

だが望んだ生き方じやない —— 本当は俺だつて兄貴みたいな放縦な生き方に憧れてたんだ
 放縦ならとっくに野たれ死んでるさ —— 俺は帰る家のある只の馬鹿息子だ いまだに甘つたれ
 てるさ —— しかしどうしようもない 帰りたいって思つちまうんだ 放埒な振りをすればする
 ほど自分自身が苦々しいんだ —— 親父もとうとうくたばつちまつたが —— 帰りたいな あ
 の頃のこの家に —— いかん
 どうした

発作だ —— 眠くなつてきた 濟まんが薬を取つてくれ
 ナルコレプシーか 厄介だな —— (起きて) おい 何処にあるんだ その薬は

おい なんだもう眠つてやがる —— 博打打ちのままでどうしようもないクズなら 僕が世話し
 てやつたのに —— なんで小説家なんかになりやがつた 馬鹿 ——

男3、男1の布団を直してやつた。

二村定一の「君恋し」が流れた。

人々が現れ、闇の中から男1を見つめた。